



The Kyoto University Library Bulletin

## 勉強すること

湯川 秀 樹

私が京都大学に入学したのは大正15年の春であったが、先ず最初に感じたのは、いかにも大学らしい静けさであった。当時の物理学教室は時計台の西側にあった。現在の燃料化学教室の赤煉瓦の建物がそれである。二階に小さな図書室があり、そこで専門雑誌を読みふけた。隣の三高の学生だった頃とは打ってかわって、スポーツや野球の応援などはきれいに忘れて、いちずに勉強した。それがまた何ともいえず楽しかった。東大路の通りにも、まだ電車は走っていなかった。私の精神集中を妨げる雑音もなかった。私のあこがれていたアカデミックなふんい気だけが、そこにただよっていたのである。

それから40年たった今日の京都大学はどうであろうか。学生の数は何倍かになり、新しい建物が次々とできていった。空地も少なくなった。人の往来も激しく、建築工事の騒音も絶えない。このように変貌してゆく大学の中で、精神を集中させることは容易でなくなった。今の学生諸君は気の毒だと思う。しかし環境のよかった昔でも、勉強しない学生はたくさんいた。先生も今の方が、ずっと雑用が多いのだが、昔の先生が皆、研究らしい研究をしていたわけではない。幸いにして京都大学は、まだまだアカデミックなふんい気の多分に残っているところである。東京へ行って駿河台からお茶の水のあたりを通るごとに、やっぱり京都は落ちついて勉強ができるところだという感を深くする。京大の付属図書館もずいぶん立派になり、便利になった。何はともあれ、学生時代に勉強しておくことである。

(基礎物理学研究所長)

## 文献検索の機械化を望む

立派な医学図書館が新設されたことを衷心よりお祝いする。日々多数の新鋭医学者がこの図書館を利用する所を見て非常に嬉しい。最近の大ヒットに相違ない。この図書館は藤原財団、ロックフェラー財団及びチャイナ メジカル ボード等の援助で出来上り大いに利用されていることを思えば、この種の専門図書館が医学研究者の間に如何に久しく切望されていたかが明白である。

斯様な図書館が新設されるに至った意義の一つとして、若い学徒の文献検索の修練道場が狙い所であろう。今日の訪問者がやがては卓越した研究者に、又は実地医家に成育し、今日の努力が後日偉大な業績の完成の基となるのが望まれているに違いない。然し私が時々目撃する所は若い研究者が不慣れな文献渉猟に非常な努力と貴重な時間を消費している事実である。若し適当な方法が工夫されて是等の若い人々に文献渉猟の便宜を計ることができれば、鋭気の青年研究者の貴重な時間を節約し得、実験になり、臨床観察になり、又は実験成績の整理なりに振り向けることができる。こんな効果を期待するためには種々の方法があるだろう。その一つとして最近注目されてきた電子計算機の利用を考えてみては如何？私は多年渉猟した文献の控えのカードを私なりの我流に分類して蓄積している。然し私の常に感じる所はもっと巧みな方法でカードの整理ができておれば、文献検索に時間の節約ができると云うことである。私自身は電子計算機については全くの素人であるが、専門家の話では文献整理の如き方面への電子計算機の利用は大いに有望のようである。例えばある若い研究者が腹部大動脈瘤の研究を始めたとする。参考文献の遺漏がないようにするには図書館の龐大な蔵書中から、古い症例報告をはじめ最近の研究に至るまで検索するのに長時間の労作を為しとげねばならない。こんな時に若し予め整理された記録から電子計算機のような優秀な手段で関係文献目録が供給されれば、この研究者をどんなに援助したことになるだろうか。多数の報告から彼が彼の研究に直接関係のある必要文献の複写を求め、座右に備えることができれば多大の便宜を得たことになる。そうなれば図書館活動が更に拡大され、京都ばかりでなく日本全国は云うに及ばず全国各地の研究施設からの要望に応ずることができ、高い賞讃を博するに違いない。

こんな仕事は唯だに医学に限るものでなく他の学問の領域にも希望があることと思う。また斯様な計画が日本に一所あれば全国の要望に応じ得るのであるから、今回新設された京大医学図書館に限る訳ではないが、私はこんな立派な医学図書館が出来たのであるから更に一步を進めて、先づ医学領域から、そして京大医学図書館から文献検索の機械化を考えていただきたい。

医学図書館の新設を祝賀すると共に私の年来の希望を述べる。(名誉教授 舟岡 省五)

### 京都大学図書館改善委員会終る

京都大学図書館改善特別委員会は去る昭和39年12月11日に第1回が開催されて以来、およそ一年間にわたり行なわれてきたが、昨年の11月16日の第10回をもって一応終了した。この間委員会は大学図書館の近代化の見地から、図書館サービスの現状における問題点と将来のあり方、部局図書室の構想、付属図書館の概念等の重要な課題をはじめ多くの問題点について検討し、活発に論議され、有益な助言や、意見が出された。今後の図書館運営については本委員会の成果が強く打ち出されるものと期待されている。

### テキサス大学出版部から図書寄託される

さきに、アメリカ大学出版部協会の日本における「寄託図書館」(Depository Library)として本館が指定され、その第一陣としてプリンストン大学出版部から図書を受取ったが、このほど、第二陣としてテキサス大学出版部からも下記図書が寄託された。閲覧事務室のカウンターに展示しているのでご利用下さい。

#### テキサス大学出版部図書リスト。

Schmitt, Karl M. : Communism in Mexico ; a study in political frustration. March 1965.

Corke, Helen : D. H. Lawrence ; the croydon years. May 1965.

Collingwood, R. G. : Essays in the philosophy. of history Feb. 1965.

Cranfill, Thomas Mabry and Clark, Robert Lanier Jr. : An anatomy of the turn of the screw. May 1965.

Manuel, Herschel T. : Spanish-speaking children of the southwest ; their education and the public welfare. June 1965.

Lear, Floyd Seyward : Treason in Roman and Germanic law ; collected papers. May 1965.

Price, John Valdimir : The ironic Hume. June 1965.

Vagtborg, Harold, *ed.* : The baboon in medical research ; the proceedings of the First International Symposium on the baboon and its use as an experimental animal. March 1965.

#### プリンストン大学出版部追加図書リスト。

Coleman, James S., *ed.* : Education and political development. Studies in political development, 4.

Tarán, Leonardo : Parmenides. A text with translation, commentary, and critical essays.

Cairns, Stewart S., *ed.* : Differential and combinatorial topology. A symposium in honor of Marston Morse.

#### 全国図書館大会の開催

昭和40年度全国図書館大会が11月25日より3日間熊本市で開催された。この大会は明治39年以来開かれてきた伝統ある集会であり、同県では50年ぶりの開催で県挙げての大会気分が盛り上がる中で、全国から図書館関係者及び利用者側の参加者3,000名をこえるマンモス大会となった。今大会の趣旨として、ひろく文化の全分野にわたって、国民の必要とする情報の伝達、資料の提供に役立つ資料センターとしての図書館の近代的な役割と機能を中心課題とした。第1日全体会議、第2日館種別部会、第3日全体会議をもって全日程を盛会のうちに終了した。ここでは第2日の大学図書館部会の模様を摘記してみる。この部会は大学図書館の施設および機構の近代化をいかに進めていくべきか一事例発表と協議題を中心に、われわれの当面する諸問題を討議した。全般的に見て旧き大学図書館像から新しい図書館像へ、保管のための図書館から利用のための図書館へいかにして有効な脱皮をなしとげるかという根本命題への・困難さと悩みとのいろいろな形での表白—ヴァリエーションであったといつてよい。

最後に大学図書館専門職員の教育計画についての協議題中、一発言者の「大学図書館員はそれぞれの学問分野で高度の専門知識を研さんしたものがなるべきである」との意見に対して、期せずして会場に満ちた賛意と共感の深さこそ、われわれ図書館員の資質の根本に関することだけに、強い感銘をうけたことを特記しておきたい。

#### 特別講演会 —宋版大蔵経について—

12月4日(土)午後1時半より本館の主催で会議室において、竜谷大学教授小川貫弑氏によって上記の講演が行なわれた。梵文大蔵経の成立過程より、中国に伝来して800年に渉る漢訳時代を経て集大成され、写本形体から仰刷形体に移り、北宋の太祖開宝4年に勅版が計画され、太宗の太平興国8年(983)に開封府太平興国寺において大蔵経の仰刷が開始されたが、この勅版は神宗の熈寧4年(1071)に民間に移管され、欽宗の靖康2年(1127)金軍の入寇で廃絶した。神宗の時(1080頃)福州東禅寺では崇寧萬寿大蔵が開板されて元代1326頃まで続き、他方、徽宗の時(1112頃)福州開元寺において毘盧大蔵が開板されて元初(1298頃)まで続いた。元の興起とともに南宋においては湖州思溪蔵が欽宗靖康元年(1126)に円覚禅院において開板され、1276年元軍の兵火で経板が焼失した。また磧砂版が理宗紹定4年(1231)平江府磧砂延聖禅院において開板され、仁宗延祐2年(1315)に全大蔵経板が完雕された等の事情が説明された。講演後、本館所蔵の宋版について具体的に説明があって5時前に終了した。

## 他学部図書室の利用と保管転換

一冊の書物には限りなく複雑な要請の生ずる可能性がある。そのために附属図書館では、大学関係者全員が大学内全蔵書を利用するための総合カード目録を作成している。他学部所蔵図書の利用者にはこれが測りしれない便益を与えている。

この総合目録を使用して他学部の図書室へ本を借りに行くと、ある学部では自分の印だけで貸出してくれるが、他の学部では主任教官の印を必要とし、更に別の学部ではその上更に当該学部の関係教官の許可印も貰ってこななければならない。勿論そこで必要であるが故に購入された書物であり、その学部内の利用に支障をきたすような貸出しを避けるための許可印ではある。しかし利用者側では多少ともカチンときて、利用意欲は自然に減退する。自分の主任教官印を貰うために数日を要することがある上に、全く面識ない他学部の教官の印を貰うために在室日時を調べねばならず、ドアを押す手も何となく重い。こんな事で私も、借用用紙は受取りながら結局借らずじまいになったことが数度あった。どの部局でも附属図書館の現行の手續程度の簡略さで利用できる方法、あるいは総合目録をより完全に他学部学生の利用の窓口を一本化する等の策が欲しいものである。

次に、ある時期にある部局で購入された蔵書が現在では既に利用価値が殆んどなくなり、むしろ他部局の方でより多く必要となっている場合がある。できればこの蔵書は、より効果的に利用される部局へ保管転換さるべきだと思われる。私の専攻の場合でいえば、他のある学部図書室の書架四面にわたって関係図書がおかれているが、その大部分は既に絶版となり、しかも私の学部にも附属図書館にも全く蔵置されていない。同図書室の係によれば、この蔵書の利用者は殆んど私とA氏（学外者）だけで、当学部内の利用は皆無に等しいとの話である。我々の方では常時傍に置いておきたい程の書物が、他学部で殆んど利用されぬままに書庫の奥深く埃をかむってしまわれているとは、何としても心外の至りである。

二、三度両学部の図書室の人に、これを、この専門の講座の置かれている私の学部へ保管転換できぬものと訊ねてみたが、明確な解答を得ることはできなかった。これとは別に、私の学部のある人が、他部局で放置されている古雑誌のバックナンバーの保管転換を申込んだが、結局長期貸出しという形で移されるに止まり、期限切れと共に返還させられたという話を聞いたことがある。

図書館員に聞いても、自学部で利用されぬ本を他学部の人のために保管し、貸出手続をさせられるのは迷惑だ（実際は親切に世話をしているが）という。保管転換は、利用者側でも図書館員側でも要求されておりながらなかなか実現されない。この事情は、部局図書室のセクショナルリズム、教官の専横、あるいは転換事務手続きの煩雑さなどで説明されているようだが、なお漠としたものが残る。

京大の図書館蔵書にはすべて、楕円の枠に囲まれた「京大」という受入印、及び「京都大学図書之印」という蔵書印が捺されているが、ここに論拠をとるならば、あらゆる蔵書は部局の枠をこえた京大という単一施設の所有物であり、部局間の配分は全学の需要状況に応じて決定され、また変更さるべき筈のものである。一方部局図書室の蔵書は、学部割当ての講座費で購入されたものである。この資金源を楯にとるならば、部局蔵書はまず部局の所有物であり、原則として保管転換は不可能となり、利用も当然学部内優先となる。

「部局図書室の蔵書の所有者は一体誰か」先にみた利用上の不便、保管転換の困難性なども、つまるところこの所有権の所在如何につらなる問題ではなからうか。

K・M（文学部大学院生）

## — 資料紹介 —

## ○ 学術雑誌総合目録 文部省大学学術局編

学術雑誌総合目録は、国公私立大学、大学附置研究所、文部省直轄研究所等が所蔵する人文・自然科学に関する内外の逐次刊行物の目録である。終戦後、当時文部省科学教育局は学術研究会議に設けられた「学術文献調査研究特別委員会」と協力して学術文献の利用を促進し、文献の欠乏に対処する一方策として、広く学術に関する文献の総合目録を編集、刊行する計画をたてた。その後、学術研究会議は廃止され、日本学術会議となり、また昭和24年6月の文部省の改組を機に文部省内に「学術文献総合目録審議会」を置き、総合目録作成の方針を審議すると共に大学図書館の協力のもとに、その計画の実現をはかったものの一部分である。1953年版、1954年版は旧7帝国大学所蔵のもののみに限られていたが、その後、各大学、研究機関の研究活動、新たな文献整備、外国雑誌の入手状態はめざましいものがあり、加えて近來、それらの機関における文献の相互貸借、マイクロフィルム等による複写サービス業務が盛んとなり、円滑な運営を行なう上からも網羅的かつ完璧な総合目録の増補改訂が強く要望されるに至った。そこで、国公私立大学、大学附置研究所、文部省直轄研究所の協力を得て登場したのが1957年版(自然)、1958年版(人文)であり、サプリメントはその補足版である。これらの記述は標題、副標題、刊行団体名、出版地、所蔵巻号、備付場所、必要注記等からなっているが、標題は主として最新の形をとり、旧標題、別標題等には参照を付け、二カ国語の標題を有するものは慣用されている形をとっている。また国際会議の出版物は会議名称から記入されており、排列は標題のアルファベット順で、ロシア語、ギリシア語等はローマ字に翻字されている。現在、欧文篇では自然科学—1953年版、1957年版、1960年版(サプリメント版)、1962年版(サプリメント2)、人文科学—1953年版、1958年版、1962年版(サプリメント1)、和文篇では自然科学—1954年版、1959年版、人文科学—1954年版、1959年版が発行され、本館ではこれらすべてを蔵し、雑誌の所蔵検索に幅広く利用されている。

○ **Ulrich's periodicals directory ; a classified guide to a selected list of current periodicals, foreign and domestic. 10. ed. Ed. by Eileen C. Craves. N. Y., R. R. Bowker, 1963.**

本書は世界中で出版された雑誌の分類別目録である。1932年に初版が出て以来、雑誌選択の手助けをする参考書として第10版の改訂を行ってきた。編者の目的はすべての分野を網羅する基本的な図書館用参考図書として出版することであった。この目的にしたがって19,776のタイトルを含むこの10版は、チェコスロヴァキヤ、ポーランド、ウクライナ、ロシア、ユーゴスラヴィア等の世界のあらゆる国々から出版された雑誌を選択し載せている。本書は年鑑、論文、シリーズ物、政府出版物は含んでいないが、初版よりも版を重ねるにしたがってより多くの誌名を抱括している。本書の特徴としては、前版に記載された雑誌で絶版になったものについても巻末の索引の中でみられること、書名の変更した雑誌は巻末の索引の中で古い書名から新しい書名への参照がつけられていることにあるが、本書のもっとも重要な特徴の一つは、抄録、および抄録を含む雑誌の場合、本書のはじめにそれらのリストを掲げているということ、また主題よりアプローチする分類別目録ではあるが、巻末の索引によって主題とは関係なくすべての雑誌が書名から検索できることである。誌名は主題別に分類され、アルファベット順に配列されている。各々の記述は書名、副書名、第1号の出版年、出版度数、価格、出版社、出版地、索引等、それぞれの雑誌に特色のある条項をも含み、もしも補遺、特別号が出版されたり、テキストが一言語以上であるならば、そのむねも記述されている。

今秋出版される第11版は、自然・人文の両分野に分冊されて発行されるが続いて購入の予定である。



## 工学部 建築学教室図書室

工学部には各教室ごとに図書室があり、主にその教室の教官、学生に奉仕している。教室の歴史や実情等によりそれぞれ図書室の規模、施設、設備状態、職員数、また運営の仕方などもかなりちがっている。良い意味では、それぞれの独自性をいかして運営されているといえる。しかし、現実では必ずしもそういった面ばかりではない。たとえば、他教室の所属の図書を借り出すとき、それぞれの教室の貸出規程が異なるため非常に不便を生じたりしている。

一般に大学の中での図書館はその重要な任務とはうらはらに、ややもするとその任務を充分果し得ない種々の条件下にあって、教室の図書室では機構上の問題や経済上の問題等でますますその任務を遂行出来にくい実情にある。図書室としての悩みも多い。今回は工学部図書室の一つ、建築学教室の図書室を紹介しよう。

建築学教室図書室は電気総合館の北側、建築学教室本館の二階東角にあり、書庫面積約 155m<sup>2</sup> と整理事務室兼閲覧室約 30m<sup>2</sup> ほどの図書室である。

蔵書数は約 3 万、蔵書の内容は建築工学、その他工学関係図書、雑誌、美術、美術史、歴史等が主なものである。この図書室の特徴はやはりその蔵書の内容であろう。他の工学部の図書室とはちがって、総合的学問たる建築学の性格を反映し、美術、歴史等人文科学的な図書の全体に占める率が非常に高いことである。したがって文科系の教官や学生の利用もしばしばある。

利用者は建築学教室の教官、学生が主でその他学内、外の研究者、学生の利用も時々はある。しかし、何といても教官の教授、研究活動のための利用が主であり、学生の



利用者に充分こたえられない傾向にある。

図書室の一番の悩みは、空間的な問題である。近年受入冊数が激増しており、数年前に書庫を増設したが、当時たてた10年先ぐらいの見透しも、すでに反古になってしまっている。閲覧室は整理事務室の一隅に新刊雑誌と数ヶの椅子と机をおいただけのものになってしまっており、閲覧にも整理事務にも支障をきたしている。しかし講座増設の折柄、教官室、研究室等諸施設の不足している現状では図書室の拡充は望めそうにない。現在、書庫が狭いので図書がどうしても教官室に置かれたままになる傾向にあり、利用上また図書の管理上、非常に困難な問題をかかえている。職員数は 4 人、本年より発足した第 2 学科の図書も一括して扱っている。2 年前まで職員は 1 人であったため目録など不備な点も多いが、最近、今まで備えてなかった書名目録の作成に手をつけはじめ、利用者の便に供すため努力している。

### 世界医学図書雑誌展の開催

きたる 2 月 23 日 (水) から 25 日 (金) までの 3 日間、医学図書館 3 階で世界各国最新の医学書、医学雑誌約 3 千点が展示される。この図書展への出品国はアメリカ、イギリス、東西ドイツ、ソ連ほか 23 か国にわたり盛会が期待されている。

**訂正** 前号の記事に一部誤りがありましたので訂正するとともに関係者にお詫びいたします。2 頁 3 行目漢籍 6 万部 10 万冊を漢籍 6 万部 20 万冊に訂正。

**あとがき** 新しい年がめぐってくるたびに今年こそ図書館が飛躍する年であることを期待し、私達の描く図書館像に一歩でも前進するこ

とを希う。

静脩も三年目を迎える。今年も皆さんとともに歩んでいきたいと思っている。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 2, No 5 (通巻 9 号) 1966 年 1 月 20 日発行・発行人岩猿敏生  
発行所 京都大学附属図書館 京都市左京区吉田本町 電代表 77-8111 (内線) 150-159